2006 年 1 月 11 日

人間科学研究科長殿

井澤和大氏博士学位論文審査報告書

井澤和大氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱をうけ審査してきましたが、2005 年 12 月 17 日に審査を終了いたしましたので、ここにその結果をご報告いたします。

記

１．申請者氏名　　井澤和大

２．論文題名　虚血性心疾患患者における健康関連 QOL(Health-Related Quality of Life) 向上のための運動指導方策

３．本文

本論文の概要

本論文は、心疾患患者における健康関連 QOL に着目し、その経時的変化、重症度別、心臓リハビリテーション（心リハ）の影響、心リハ終了後の運動継続率と運動継続別による健康関連 QOL について検討したものであり、行動科学的なアプローチをもとに、心リハ施行患者の健康関連 QOL 向上のための運動指導方策について提案することを目的としている。

その結果、心リハに参加した心疾患患者の健康関連 QOL を長期的に見た場合、健康関連 QOL の各下位尺度は、心疾患発症後１、6、19 ヵ月において改善し、心疾患発症後 19 カ月時点における健康関連 QOL の全ての各下位尺度は、国民標準値に到達していた（第 2 章）。また、重症度別の検討では、心機能が軽度から中等度においては、その影響はないものの、心不全患者などの低心機能患者においては、身体機能指標と同様に健康関連 QOL も低下していることが明らかとなった（第 3 章）。さらに心疾患発症後 3 カ月間の運動療法を主体とした回復期心リハは、身体機能指標の改善に加え健康関連 QOL にも貢献することが明らかとなった。このことは、心リハが身体機能指標などの客観的指標のみならず患者の主観的な機能状態も改善させており、包括的な治療法として有効であることを示していた（第 4 章）。一方、心疾患発症 12 ヵ月時点での健康関連 QOL を運動の継続別にみた場合、6 カ月間の回復期心リハ終了後も運動を継続している例では、健康関連 QOL の全ての下位尺度得点は国民標準値に到達していた。このことは、心リハ終了後の運動の継続が健康関連 QOL の維持向上に貢献している可能性を示していた（第 5 章）。

しかし、心リハにおける運動の継続率を検討した研究（Oldridge、1988）では、運動の継続率は、心リハ開始より低下することが報告されており、また長期にわたる運動療法に関しても、継続率がさらに低くなる傾向が認められているため、運動の継続や健康関連 QOL を高める方策として、回復期心リハが身体活動セルフ・エフィカシーに及ぼす影響について検討

した。その結果、心リハが身体活動セルフ・エフィカシーの向上に影響を与えることが明らかとなった（第 6.1 章）。次に維持期における運動の継続を促す運動指導方策として、回復期心リハ期間中において通常の心リハプログラムに加え、セルフ・エフィカシーを高めるための働きかけおよびセルフモニタリングとして、患者自身に在宅での身体活動量を記録させるようにしたところ、介入群は対照群に比し、運動の継続率、身体活動量および身体活動セルフ・エフィカシーが高くなることが明らかとなった（第 6.2 章）。

これらの知見に基づいて、最後に、虚血性心疾患患者における健康関連 QOL 向上のための運動指導方策について提案された（第 7 章）。

本論文の評価

急性心筋梗塞、狭心症などの虚血性心疾患に対する治療は、生命予後の改善とともに病後の生活の質（QOL）の向上を大きな目的としている。それら両者を目的として行われる一連の過程が、包括的な心リハである。我が国における従来の心リハでは、主として心機能ならびに筋力値や最高酸素摂取量などの客観的に測定される生理学的指標が効果測定の指標として用いられてきた。しかし、ストレスやうつなどが心疾患患者の生命予後を規定する要因の 1 つであることが明らかにされおり、それらの改善に対する心リハの貢献が期待されている。また、最近では患者自身が直接報告する患者の視点で捉えた主観的な健康度・機能状態を表す「健康関連 QOL」も、心リハの重要なアウトカムとして認知されるようになった。本研究は、従来から重要であると認識されていながらもその効果が検証されてこなかった健康関連 QOL に焦点を当てた研究であり、心リハ終了後の運動の継続が健康関連 QOL の維持向上に貢献している可能性を示したことは、本研究の意義の一つであるといえる。

ただし一方で、心リハ終了後において運動を継続することは、心疾患患者の二次予防のために重要であるものの、運動の継続率は長期化するほど減少することが知られており、運動の継続を促すための方策を検討する必要がある。本研究は、この運動アドヒランスにも注目し、心リハのプログラムの中に行動科学的技法も盛り込むことによって、セルフ・エフィカシーの向上効果が期待できると共に、運動の継続率ならびに身体活動量の増加にも貢献できることを示したという意味で、大変意義深いといえる。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の学位を授与するにふさわしい価値を有すると認める。

４．井澤和大氏博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学教授	教育学博士（東京大学）	中村好男
審　査　員	早稲田大学教授	博士(医学)（東京医科大学）	村岡　功
審　査　員	早稲田大学教授	博士(医学)（順天堂大学）	荒尾　孝

以上